シーワールドのアニマル達

●マダラトビエイ

マダラトビエイは、熱帯から亜熱帯の暖かい海に住むトビエイの仲間で、その背中にある白い斑点と長い尾が特徴です。また、鼻がつんと前に大きく出ていて、とても特徴のある顔をしています。実はこの飛び出した鼻は、胸ビレが変化してできた頭鰭（とうき）というもので、好物のアサリを探しているときは、飛び出した鼻をアヒルのクチバシのような形にして海底を泳ぎまわります。

トロピカルアイランドの大水槽「無限の海」では、５尾のマダラトビエイが飼育展示されていますが、一番小さい個体は昨年の11月に鴨川沖で捕獲され、他の４尾は福岡の「海の中道海洋生態科学館」より大型トラックで約20時間かけて当館へやってきました。これらのマダラトビエイは、とても人なつっこくて、水槽に潜って掃除をしていると、エサをもらえるものと思い違いをして寄って来て、潜水ボンベやダイバーの頭を大きな鼻で突ついてビックリさせることがあります。
愛きょうのある顔をして優雅に泳ぐマダラトビエイの姿をご覧下さい。

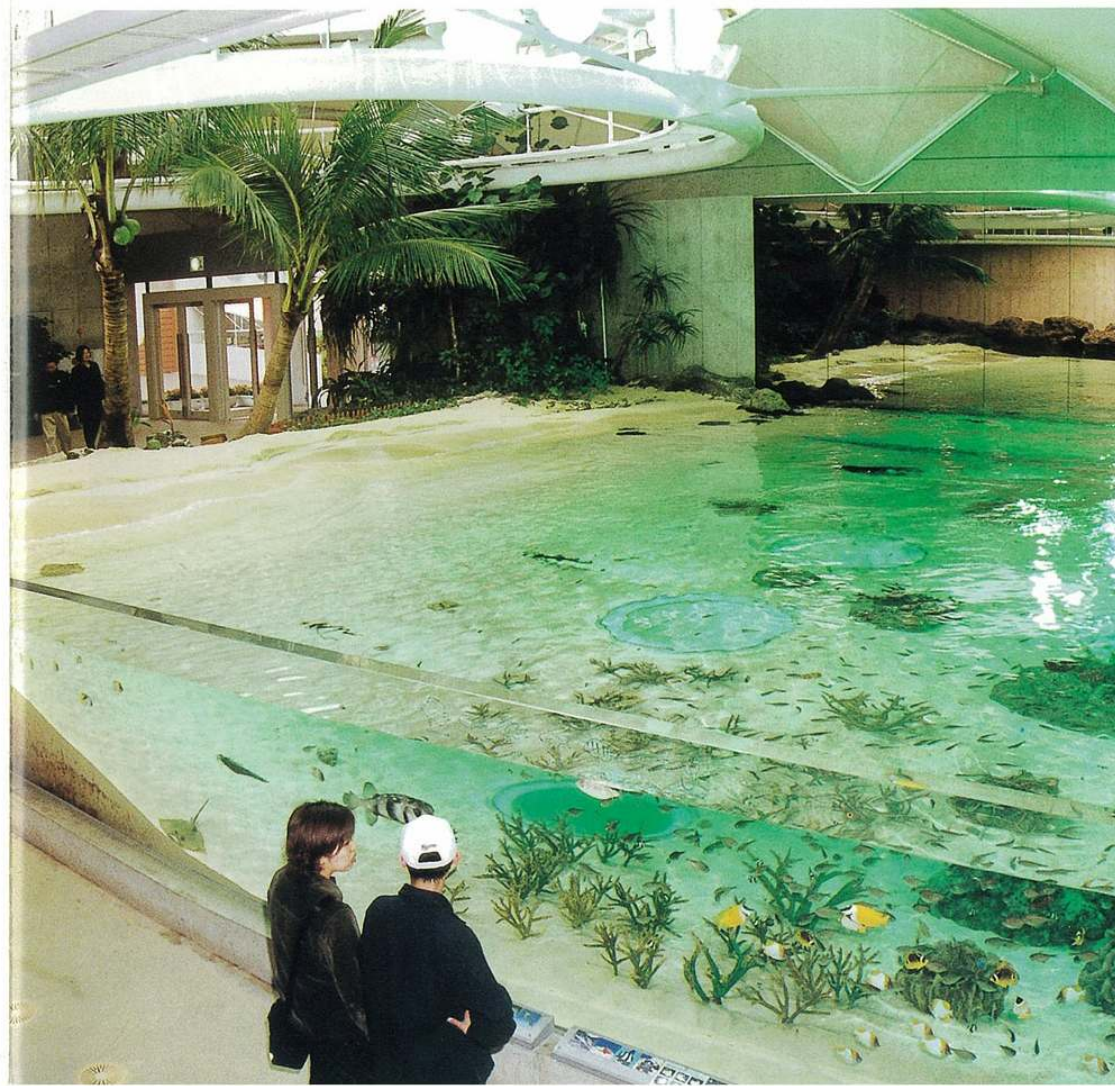
（ハッ木）

●バイカルアザラシ

世界には18種類のアザラシがいますが、そのほとんどが海で生活をしていて、河川や湖の淡水に生息するアザラシはバイカルアザラシも含めてわずか３種類です。バイカルアザラシは名前のとおりロシアのバイカル湖に住み、成長しても体長130cm、体重90kg程度にしかならない小型のアザラシです。黒色に近い体色とずんぐりとした体型をしていて、前足には黒く大きな爪がはえ、この爪を使って氷に呼吸のための穴を開けます。他のアザラシと比較して眼が大きく、ヒゲや眼の上の感覚毛は太くて長く、これらの特徴もバイカル湖のきびしい自然環境下での生活と関係があるのかもしれません。当館のバイカルアザラシは、飼育当初はなかなか新しい環境になれず、安定して餌を食べるようになるまでかなりの日数がかかり、あまりの臆病さに先行きがとても不安でした。しかし、一度環境になれると、逆に人にもよくなつき、多少のことでは驚かない、図太いところがあり、他のアザラシと比べても、かなりおっとりとした性格を見せてくれます。今では餌の時間になるとまっ先に接近してきて、つぶらなひとみで係員を見つめています。

（中野）

▲マダラトビエイ *Aetobatus narinari*

▲バイカルアザラシ *Phoca sibirica*

さかまた No.56 （禁無断転載）
編集・発行 鴨川シーワールド
〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464－18
☎(0470)92-2121
http://www.mitsuikanko.co.jp
発行日 平成12年12月

さかまた

鴨川シーワールド NO.56

南の海の水中散歩
―トロピカルアイランドオープン!―

▲エントランス「南国の渚」をのぞむ

今年7月22日、南の海の水中散歩をテーマに、赤道直下のサンゴ環礁をモデルとした「トロピカルアイランド」がオープンしました。セレモニーでは、キリバス共和国商工観光大臣や千葉県知事、鴨川市長らをお招きしてテープカットが行われました。それでは、500種7,000尾のコーラルフィッシュが乱舞する、サンゴ環礁をそっくり再現したトロピカルアイランドを観覧ルートに沿って紹介しましょう。

「南国の渚」

さざ波が静かにうち寄せる、白い砂浜と南国特有のエメラルドグリーンの海をイメージしています。エメラルドグリーンをだすために、自然光をとり入れ、照明に工夫をこらし、白い砂浜にはココヤシやグンバイヒルガオなどが生い茂っています。

今までの水族館のイメージを一新するココヤシのある渚は記念写真ポイントとして人気があります。

「ふれあいの浜」

潮の満ち引きによってできる潮だまり「タイドプール」を再現しています。浅場では、ウニやヒトデ、ナマコ、ヤドカリなどにふれることができますので小さな命にそっとふれてみて下さい。ガラス面から眺める深場では、生きたサンゴやシャコガイと、その周りに群がるスズメダイやハゼなどの小魚を見ることができます。

▲「ふれあいの浜」

「エメラルドの入江」

サンゴ環礁の最も特徴的な地形である「礁湖」を再現しています。サンゴ環礁の真中にある海水でできた湖が礁湖で、ここでは白い砂底に点在するサンゴの群落に群がるチョウチョウウオやスズメダイのほか、波打ち際に群がるコバンアジの幼魚なども見ることができます。ここもまた、美しい魚たちとの記念撮影ポイントとして賑わっています。

「サンゴ礁の庭」

外海に面したサンゴ礁の縁は「礁縁」と呼ばれ、ここはサンゴ礁で最も美しく、赤くきれいなハナダイ類や、おどけた表情のソウシハギ、カラフルな模様のブダイ類などが目を楽しませてくれます。この水槽にはメインの観覧面の他に、「オーバーハング」したガラスや、水底の半球状ガラスに頭を入れて水中を見る「ピーピングコーナー」があり、海の中にいるような雰囲気で魚たちを見ることもできます。

▲「サンゴ礁の庭」

「幻想の岩場」

礁縁から、さらに潜っていくとさまざまな形をした「洞窟」があります。ここでは巨大なニセゴイシウツボやニシキエビ、生きた化石として知られるオウムガイ、眼の下が青白く光るヒカリキンメダイなど、洞窟や岩の割れ目などの暗がりに潜む生き物たちを見ることができます。

「無限の海」

サンゴ礁の島を離れ、えんえんと続く外洋の入り口、「沖合い」を再現しています。幅10m、高さ6mのオーバーハングしたアクリルガラスが目の前にせまる、トロピカルアイランドの中では最大の水槽です。中にはクマザサハナムロの大群や、アカシュモクザメ、トラフザメやマダラトビエイ等大型のサメ・エイ類、シイラや通称「ナポレオンフィッシュ」で知られるメガネモチノウオなどが生活しています。それぞれの魚たちは生活形態に合わせ、単独で泳ぐものもいれば群れになって泳ぐものもいますし、泳ぐ深さも違いますので、ちょっと注意してみると面白いかもしれません。

▲「無限の海」

「イベントプラザ」

無限の海の反対側にある「イベントプラザ」では「サンゴ礁の宝もの」をテーマとしてサンゴ礁の情報を提供するとともに、ちょっと見ただけでは気付きにくい、サンゴの間に暮らす小さな生き物やサンゴ砂の正体などを、水中CCDカメラや顕微鏡、ルーペなどを使って拡大して観察できるようになっています。

▲「イベントプラザ」

かけ足でトロピカルアイランドをご紹介してきましたが、是非あなたもダイバー気分で「南の海の水中散歩」をお楽しみ下さい。　(中坪)

トピックス

オープン30周年
この10年のできごとをふり返る

鴨川シーワールドは今年の10月1日にオープン30周年をむかえました。そこで1990年からの10年間を簡単にふり返りたいと思います。

1990年に、日本で初めてロシア産のベルーガ3頭をウラジオストックより輸送しました。カスピカイアザラシ、コシグロペリカンも日本で初めて展示を開始した種類です。1996年には、定置網に迷入した、飼育下では大変めずらしいハセイルカを保護し、現在も飼育が続けられています。この10年間に、飼育中の鯨類、鰭脚類、ラッコ、ペンギンのうち、のべ11種52個体の子供が誕生しました。中でも、1994年に誕生したセイウチの「チャッキー」、1998年に誕生したシャチの「ラビー」は、日本で初めて飼育下で生まれた個体です。また、この間に2頭を無事出産したバンドウイルカの「スリム」は、1995年に日本での最長飼育記録をぬりかえ、現在も子育てにはげんでいて、当館で最も長生きしている動物です（現在、飼育29年）。

房総に住む水の生き物を中心に展示していた「パノリウム」は、そのテーマである「水の一生」をさらに発展させて、川の源流から海までの様々な自然環境を再現し、生き物たちの生態を紹介する「エコ・アクアローム」に生まれ変わりました。川の水の流れや、岸辺の潮だまりから沖合までのいろいろな波の動きも再現され、そのリズムを上手に利用しながら生活する生き物たちの様子を観察できるようになりました。この生息環境の再現は、海獣類や鳥類の展示にも応用され、海藻が生い茂り、サケが群れをなす水槽で、ラッコが元気に遊びまわる「ラッコの海」が1994年にオープンし、関係者の注目を集めました。1998年には、アシカやアザラシ、ペンギン達の故郷の自然環境を再現し、動物達のありのままの姿をま近で見て、その息づかいを肌で感じることができる「ロッキーワールド」が完成しました。

海外の水族館との交流も積極的におこなわれ、鯨類の人工授精協同プロジェクトなど、21世紀へ視野を向けた活動も始まりました。1998年には、2,500万人目のお客様をおむかえしました。より多くの人たちが遊びながら学び、沢山の発見に驚きながら生命のすばらしさに感動する、そんな21世紀の水族館をめざして今後も努力したいと思います。

（荒井）

主なできごと（1990年～2000年）

1990年10月24日　ロシアよりベルーガ3頭搬入
1991年7月20日　マリンシアター改修
1992年4月28日　ハワイ・シーライフパークへオキゴンドウ2頭搬出
12月22日　「沖合の小島」オープン
1993年1月14日　ラッコ「クリン」出産（メス、「クララ」）
2月24日　サンシャイン国際水族館よりイロワケイルカ2頭搬入
4月29日　カスピカイアザラシ4頭搬入
7月15日　アメリカ・シーワールドよりキタゾウアザラシ2頭搬入
8月7日　入園者2,000万人を達成
1994年1月14日　ラッコ「クリン」出産（メス、「クーピー」）
4月1日　「ラッコの海」オープン
6月6日　セイウチ「ムック」出産（オス、「チャッキー」）
7月5日　モモイロペリカン6羽搬入
7月31日　動物とのふれあい、「アニマ・アウト・ガイド」開始
9月13日　オウサマペンギン1羽孵化
1995年1月2日　バンドウイルカ「スリム」日本最長飼育記録達成
3月3日　シャチ「マギー」出産（オス、新生児は生後30分で死亡）
4月15日　コシグロペリカン5羽搬入
1996年7月30日　ハセイルカ1頭保護
12月21日　「パノリウム」改修工事終了、名称を「エコ・アクアローム」に変更
1997年5月27日　セイウチ「ムック」出産（オス、「キック」）
6月9日　トド「ルイ」出産（メス、「レイ」）
6月19日　「ひと夏の体験、ドルフィンランデブー」開始
7月19日　夜の水族館探検、「ナイトアドベンチャー」開始
10月7日　シャチ「マギー」死亡
1998年1月11日　シャチ「ステラ」出産（メス、「ラビー」）
7月25日　「ロッキーワールド」オープン
7月28日　「沖合の瀬」オープン（「ラッコの海」を改修）
8月10日　入園者2,500万人を達成
1999年10月1日　ロシア、カムチャッカよりエトピリカ30羽搬入
2000年5月3日　セイウチ「ムック」出産（メス、「ミック」）
6月4日　アメリカ・シーワールドよりジェンツーペンギン5羽搬入
6月8日　アメリカ・シーワールドと「鯨類の人工授精」協同研究開始
7月22日　「トロピカルアイランド」オープン

ラビー夏の活躍と成長

▲父親ビンゴとランディング

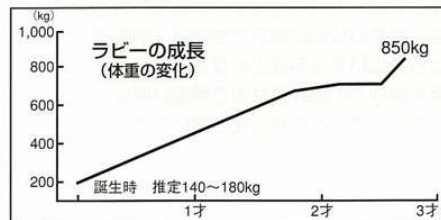
今年の夏から子シャチのラビーがトレーナーとともにジャンプする「スカイロケット」をパフォーマンスで披露し、大活躍しています。

昨年までは、小さな体で母親のステラと一生懸命ジャンプする姿が人気を集めていましたが、今年のラビーはさらに大きくなり、一人前（？）にスカイロケットやリフティングなどの大技をこなすなど、その成長ぶりをたくさんのお客様に印象づけています。

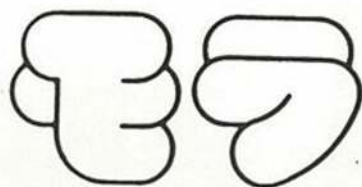
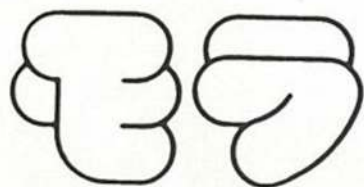
親離れの時期に入ったラビーは現在、体重850Kg、体長3.7mで他のシャチとくらべてもさほど見劣りしない体つきになってきました。

まだまだ成長途中のラビーですが、さらにいろいろな演技を覚え、みなさまに披露してくれることと思います。

ラビーの成長と今後の活躍にご期待下さい。

（金野）

▲「スカイロケット」もこのとおり

▲「リフティング」も決まった！

モラ

●イルカが協力 ードルフィンキャンプー

昭和大学病院小児科にかよう自閉症の子供たち7名とイルカとのふれ合いプログラム、「ドルフィンキャンプ」が7月7日から4日間にわたって「イルカの海」で行われました。子供たちは怖がることなくバンドウイルカのマースとウランの体に触れたり一緒に泳いだりととても楽しそうでした。キャンプの後で子供たちから届いたお便りを見て、これからも多くの人たちがこのイルカの海で笑顔になれるといいなと思いました。

（久下）

●飼育1,000日を迎えたマンボウ

マスコットコーナーのマンボウ（愛称「モンタン」）が、7月23日に飼育1,000日を達成しました。平成9年10月27日に房総沖で捕獲された時は、全長74cm、体重約20kgでしたが、今では全長155cm、体重約200kgにもなりました。マンボウはのんきもののイメージとは異なり、ちょっとした環境の変化でも体調を崩してしまうので飼育にはとても気を使います。飼育世界記録は当館の「クーキー」が樹立した2,993日で、この記録にはまだ遠く及びませんが、「モンタン」はとても元気ですので今後どれくらい飼育記録をのばしてくれるのか楽しみです。

（森）

●エネルギーセンター開設

シーワールド全体の設備の心臓部機能を果たすエネルギーセンターが新設され、7月のトロピカルアイランドのオープンと同時に稼働を始めました。エネルギーセンターには、電力の受配電設備をはじめ、ボイラー、冷凍機設備、非常用発電機、災害を防止する防災設備、生物たちの生活環境を維持する濾過循環設備などコンピューターで監視制御する新技術が組み込まれています。ここではお客様と生物たちの安全と快適性の維持を、施設係員が24時間体制で見守っています。

（佐野）

●レストランとギフトショップがオープン

トロピカルアイランド内に新しいレストランとギフトショップがオープンしました。全体のテーマは「南の島の朝市のにぎわい」で、店内はカラフルな色使いと素朴な雰囲気でトロピカル気分満点です。フードコート「マウリ」（キリバス語で健康）では、南国のフルーツを使ったトロピカル風の料理をはじめ、フレッシュなトロピカルドリンクなどが楽しめます。ギフトコート「ラオイ」（キリバス語で平和）では、きれいな貝殻のアクセサリーやカラフルな魚たちのぬいぐるみなどのグッズから、クリスマス島の塩などの輸入食材まで幅広い商品がそろっていますので、どうぞお立ち寄り下さい。

（青島）